

# 国語

# 入試分析

～入試ではこう出る!!～

## 問一 漢字の読み書き、助動詞、短歌の鑑賞 配点20点

**漢字の難易度が上がった。**しかし、出題傾向に変化はない。漢字の読み（ア）の2「緩衝(かんしょう)」と3「彫塑(ちょうそ)」、同じ漢字を選ぶ熟語問題ではイの a「シンコウ(振興)」がやや難しい。(ウ)は助動詞の見分けから、再び助詞に戻って接続助詞の「で」が出題された。これで助動詞1回、助詞5回となる。(エ)の俳句の鑑賞文は、例年のように消去法で解ける。

## 問二 古文 配点16点

**標準的な難易度だった。**ただし、本文構成に変化が見られた。第一段落の内容から第二段落がまとめやオチとなる形式から、類例を挙げる形式となっていた。どの問題も本文と選択肢をよく見比べて消去法で解ける。学習法としては、基本的な古文単語と助動詞を覚えることに変わりはない。今回の本文では打消しの助動詞「ず」が「べし」と組み合わせられて「べからず」、形容詞「なし」が命令形の「なかれ」と活用していた。普段から音読して、古文に慣れていくことが重要である。

## 問三 小説文 配点24点

**難易度が上がった。**(オ)が3か4で迷うだろう。異国の地パリに受け入れられずに苦しんだ「忠正」と「フィンセント(ゴッホ)」の気持ちを読み取らなければならない。18年度の明治時代の設定のように、中学生の実体験からは想像しづらいだろう。本文を読みながら、登場人物の気持ちが分かる部分に線を引くと良い。また、選択肢を選ぶときは、読点ごとに正誤を精読する習慣が求められる。なお、18年度から2年連続で5ページ分の出題となり、記述問題は出題されなかった。2016年度から4年連続で「朗読方法」と「文体」に関して出題された。

## 問四 評論文 配点30点

**難易度は変わらない。**(ウ)の傍線部「どっぷりとつかる」や直前の「私たちとの融合」を言い換えた選択肢を探す必要がある。また、(オ)の記述問題は18年度に続いて短い語句の書き抜きが出題されたが、傍線部直後の「例えば」や「要するに」という接続詞が手掛かりとなる。消去法も活用したい。

## 問五 作文 配点10点

**難易度は上がった。**18年度とほぼ同様の形式で、図・グラフ・表を読み取る力が重視されており、記述問題も30字以内だったがまとめ方が難しい。なお、「紙製容器包装を分別して資源にする」という表現は必要だが、模範解答の「プラスチック容器包装」を含める必要は全くない。

### 入試に向けての学習のポイント・アドバイス

国語の学習に近道はない。地道に知らない語句の意味を調べ、漢字・古文の基礎単語と文法を身につけよう。一度解いて間違えた問題は、本文中の根拠と照らし合わせて復習しよう。